



日本イスパニヤ学会
Asociación Japonesa de Hispanistas
会報第 14 号 / Boletín Núm.14
2009 年 4 月 10 日 / 10 de abril de 2009

事務局

〒170-0004 東京都豊島区北大塚 3-21-10
ア-バン大塚 3F (株) ガリレオ
学会業務情報化センター 東京オフィス内
Tel:03-5907-3750 Fax:03-5907-6364
e-mail:g004esp.mng@galileo.co.jp
ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/ajh/>

広報委員会編集部

〒618-0024 京都市右京区西院笠目町 6
京都外国語大学外国語学部スペイン語学科
坂東省次研究室 Tel:075-322-6121
e-mail: s_bando@kufs.ac.jp

目 次

巻頭言 ― 音への回顧 山崎信三	2
Visita de SS.MM.los Reyes de España a Kioto Lluís Valls Campà	3
ドン・キホーテの宝もの 蔵本邦夫	4
自書紹介	
『物語 メキシコの歴史』 大垣貴志郎	6
フェデリコ・ガルシア・ロルカ著『対訳 タマリット詩集』 平井うらら ...	7
アメリコ・カストロ著『セルバンテスへ向けて』 本田誠二	8
カルデロン著『カルデロン演劇集』 佐竹謙一	10
ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ著『乳房抄』 平田 渡	11
ラウラ・ガジェゴ・ガルシア著『漂白の王の伝説』 松下直弘	12
書 評	
網野徹哉著『インカとスペイン 帝国の交錯』 井上幸孝	13
太田靖子著『俳句とジャポニスム』 片倉充造	16
Acquaroni, Rosana 著 : Las palabras que no se lleva el viento: literatura y enseñanza de español como LE/L 2 大森洋子	17
新刊案内	18
会計報告	21
委員会より	23
原稿募集	24
編集後記	24

巻頭言 — 音への回顧

私が初めてスペインを訪れた 1967 年には、未だ白黒フィルムでの写真撮影が一般的であった。郷里を発つ日の朝は、今生の別れでもあるかのように国鉄（現在の JR）北陸線高岡駅まで親類縁者が、そして翌々日には父と兄が旅先から羽田空港まで見送りに来てくれた。私立大学の授業料が約 50,000 円、大学新卒の初任給が 14,000 円ほどであり、1 ドルを 360 円、1 ペセタを 6 円に換算した頃である。首都マドリードの街を歩いても日本人に出会うことは滅多になかったが、「MIKADO」だったか、初の日本レストランが翌年にオープンしているところを見ると、相当数は居たのかも知れない。航空券は片道が 247,500 円もした。格安な船旅で 1 ヶ月半をかけて海を渡る人があったこともうなずける。キャスター付きのスーツケースは未だ市販されていなかったのではなかろうか。



山崎 信三

フランコ独裁政権下、私が縁あって勤務することになったスペイン労働省傘下の役所 (Plan Nacional de Higiene y Seguridad del Trabajo - Ministerio de Trabajo) には、背広の下に拳銃を携帯する私服警官の同僚もいた。市民に言論や出版の自由がなかった時代である。風刺漫画の冊子 “La Codorniz” (ウズラ) などはその表紙に、市の清掃職員が引くリヤカーのバケツに入れた軍人と神父の首を描き、「スペインを綺麗にしましょう！」とうたっては 4 ヶ月の発刊停止処分を受ける、というようなことを繰り返していた。しかしやがてスペインは民主国家への大きな変動期を迎える。

職業病に関する日本語文献や記事をスペイン語に訳し添削してもらう職場での日々、卒業（私が日本人第 1 号だったらしい）まで毎日 3 時間の学習に通った国立マドリード語学学院 (Escuela Oficial de Idiomas de Madrid) での午後、外国で学びの姿勢に徹することの出来た当時が懐かしい。退官した類にもう学びの喜びは再現されないのか。そんなことはない。教師とは「教えながら教えられる生涯学習」を可能とする幸せな「生涯現役」であり得る。丁度よい参考になろうか。ここで使った「生涯学習」の「生涯」から強勢は消えフラットな発音になるが、「生涯現役」の「生涯」では、「しょう」の強勢は残る日本語としての自然な音の現象がある。似たようなことはスペイン語にも見られる。強勢の有無、消滅など、美しいスペイン語の教育にはアクセントを有しない語（品詞）の徹底も不可欠であろう。再履修クラスの学生は無言のうちに、「分からない者に分かるように説いてみろ」という課題を投げかけてくれる。難解な事項をいかにシンプルに整理して伝えるか、教室はうってつけの実験現場となる。例えば、再帰動詞を、「日常の身の回りの始末はすべてこれ」というふうにも最も身近なものとして認識すれば、「動詞の行為が主語自身におよぶ」ことも理解される。levantarse, acostarse, lavarse, その他、再帰動詞には圧倒的に「-ar 動詞」が多いことや、再帰動詞肯定命令（依頼）2 人称複数形から “d” を取り “Levantaos.” とするのは、アクセントの位置を傷つける（揺るがす）ことなく、過去分詞男性複数形 “levantados” との混同を避けることが出来るから、等々にも気付くとき、師弟共に学びの工夫をさらに楽しめるのである。

平成 2 年、私は『要約スペイン語文法』（大学書林）において、スペイン語の「読み方の目安」（発音上のアクセント）として、1）アクセント符号が記されている語はその音節に発音上のアクセントを置く、と先ず説き、2）アクセント符号を記されていない語が、①母音ま

たは-n, -s で終われば後ろから 2 音節目、②-n, -s 以外の子音で終われば最終音節にそれぞれ強勢を置く、と結んだ。これはわが国における従来の指針（上記①、②が先ずあり、③例外にはアクセント符号を付ける、と続く）が必ずといってよいほど、初心者を不安に陥れたからである。全国に浸透する従来説はその後微妙に日本語の表現をいじってきてはいるが、アクセント符号付きの語を例外とみなす、あるいは第 3 番目の語類として扱う点においてはおよそ 20 年後の今日も基本的に何ら変わっていない。両者はその説き方においてまったく異なる視点を持つ。後者を指針とした場合、初心者はいずれ次のような心理的不安、疑問を抱えることになる。なぜ “examen” には符号がなく “exámenes” にはそれが記されるのか。あるいはなぜ “japonés” が “japoneses” になるのか、などである。アクセントの位置にずれが生じるわけでもないのに、同一の語が従来説ではその①にも③にも該当し、発音上規則的な語とみなされたり、そうでないとみなされたりする正体の知れないものになってしまう。アクセント符号の有無は音の変化を意味するものではなく、語の不規則性とは無関係である。スペイン語には整然としたアクセント符号表記規準があり、それを音声化する読み方に例外はないので、初心者が 100% 頼れる「読み方の目安教授法」は、今後全国的に是非ここに紹介した老兵の〈こだわりの指針〉に沿ってほしい。

「アクセント符号表記規準」と「読み方の指針」両者を満たすという意味では、例えばわが国の西和辞典にある文例の一つ、“Déme una docena de lápices.” にある “Dé-” のアクセント符号は消すべきである。確かに動詞 “dar” の接続法現在 1, 3 人称単数形には符号を記し “dé” とする。1 音節の語には基本的には記さないのだが、同形異語の強勢を持たない前置詞 “de” との違いを明らかにするための「区別のアクセント符号」を有することになる。しかし語尾に目的格人称代名詞が直結して、母音で終わる後ろから 2 音節目に強勢を持つ語となり、「表記規準」の符号を記さない語に変わっている。

分かりきったつもりで日ごろの点検を怠ると、惰性に流された切れ味の悪い授業をしてしまいそうである。今回は回りまわって〈会報の巻頭言〉というお鉢が回ってきた。1 度ならず辞退はしたが、誰かが書かなくては「会報」の発行もおぼつかない。思うところを拾い、自らを鼓舞する機会とした。発音上と表記上のアクセントの問題を解く鍵として私は、「昔日にはその位置に強勢を置く〈指示記号〉として、すべての語に表記が許されていた」とする仮説を考えている。スペイン語の音に素直な耳を傾けていきたい。(立命館大学)

VISITA DE SS.MM. LOS REYES DE ESPAÑA A KIOTO

Lluís Valls Campà

Sus Majestades los Reyes de España realizaron su primera visita oficial a Kioto los días 13 y 14 de noviembre del pasado año. Llegaron a Kioto procedentes de Tokio, donde habían permanecido durante cuatro días invitados por los Emperadores de Japón. Este viaje ha estado claramente vinculado a la promoción de la enseñanza del español y de la difusión de la cultura hispana en Japón. Esta vinculación ha quedado plasmada en dos acontecimientos. El primero de ellos es la inauguración oficial del Instituto Cervantes de Tokio, en funcionamiento desde septiembre de 2007. El segundo acontecimiento es la clausura del Seminario de Hispanistas “Presente y Futuro del Español en Japón”,

celebrado en la Universidad de Estudios Extranjeros de Kioto. En el discurso de clausura Don Juan Carlos dirigió unas palabras de reconocimiento a la labor en pro de la difusión del español y la cultura hispana realizada por el conjunto de docentes, hispanistas y estudiantes de español en Japón, considerando que permite “presagiar un brillante porvenir para el idioma español en Japón” — optimistas palabras que no deben, por su generosidad, dejar de motivarnos para hacerlas realidad. Con posterioridad a los actos oficiales, SS.MM. mostraron su lado más humano, charlando informalmente con los profesores y estudiantes asistentes al acto, y accediendo a fotografiarse con los mismos.

Finalizados los actos en la universidad, SS.MM. se dirigieron al Palacio de Huéspedes de Kioto para asistir a la recepción ofrecida por el Gobernador. En la misma asistieron a un espectáculo de teatro “noh” y a una interpretación de “koto” y danza a cargo de “maiko” y “geiko”, mientras degustaban la gastronomía tradicional de Kioto. En este acto, centrado en la presentación de la cultura de Kioto, SS.MM. y sus acompañantes mostraron gran interés y admiración por la delicadeza del vestido y el maquillaje de “maiko”, la comida y el arte japonés. Estando yo presente por labores de interpretación, me sorprendió la gran cordialidad creada entre los asistentes, facilitada sin duda por el carácter amistoso y abierto de Don Juan Carlos. Al día siguiente SS.MM. visitaron el Museo de Artesanía Tradicional de Kioto. En el mismo pudieron admirar cerámica, damasquinados y quimonos, entre otras creaciones de la artesanía de Kioto. Posteriormente SS.MM. se dirigieron a Osaka para iniciar su regreso a España, dejando un poso de respaldo a los que nos dedicamos a la difusión del español y su cultura en Japón, y unos lazos de amistad más estrechos entre ambos países. (立命館大学)



(京都外国語大学森田記念講堂にて)

ドン・キホーテの宝もの

蔵本 邦夫

昭和 54 年の「私のができたのだとして、自筆の書き込みを入れて高橋正武先生が送って下さったものだ。先生一冊の本～欧州新話『谷間之鶯』という雑誌記事が手元にある。同好の好意によって書くことが亡くなられる 5 年前のことである。その気さくな人柄が今でも忘れられない。

私がスペイン語を始めたのは、大阪で万博が開かれた年。最初の授業で「これから君たちは、スと聞けばスペインを、ドと聞けばドン・キホーテをまず思い出すようになるだろう」と言われた。不思議に今でも覚えている。友人たちは、会話クラブなどに入ってスペイン語の勉強に励んでいたが、私はもっぱらたくさんあった招待券を消化すべく、万博会場で外国人を見つけては、上手くもない英会話の練習に無駄に時間を費やしていた。当然のごとく夏休みの宿題は『ドン・キホーテ』であった。これを読んでレポートを書けというのだが、永田寛定訳は岩波文庫で6冊。課題として読むには十分すぎる量だ。ましてや漢和辞典を手元に置いて旧漢字や旧仮名遣いを読むのにはいささか悩まされた。会田由訳はというと、筑摩書房で2巻本、1ページ3段組の活字の小ささに驚いた。活字がぎっしり詰まっているというのが第一印象である。こんなもの夏休み中に読み終えることができるのかと思えた。会田訳の印象は、この翻訳文が何を言いたいのだろうと理解に苦しむ箇所があったことだ。当然読み返す、何度もそんなことをやっていると、何を讀んだものやら、どこまで讀んだものやら分からなくなり、夜半にこんな本を讀んでいたら、私の気が変になってしまうのではないかと思えた。結局選んだのは、堀口大学訳である。スペイン語の先達には申し訳ないが、当時の私にはこれが一番読み易かった。前編のみの翻訳ではあったが、『ドン・キホーテ』を窺い知るには十分であろうと高を括ってレポートを出した。評価のほどは忘れている。これがドン・キホーテと最初に出会った頃の思い出である。その後大学院で「日本におけるセルバンテスの受容史」を研究課題に選んだ後、もっぱら日本におけるスペイン文学の受容史について書いてきた。

大学でスペイン語を教え始めてから暫らく経ってからのこと、私の研究課題に興味を持って下さった高橋先生が、人を介して「会って話を聞きたい」と伝えてこられた。直接お会いできるなどとは夢にも思っていなかったし、ましてや研究課題に興味を持って下さったなどと聞き、小躍りするほど嬉しかった。だからだろう神戸のご自宅で何を話したものやら思い出せない。唯一思い出せるのは、お土産に先生の翻訳された岩波文庫を頂いたことだけである。その後入院されたと聞きお見舞いに出かけたが、心配気な私を見てユーモア交じりに「この病院は、死期が近づくと天国に近い階上の病室になる」と言われた。同室の入院患者も私も笑っていた。先生も楽しげに笑っておられた。見舞いに來たのに、返って先生の笑顔に癒されて帰ることになった。あの時の笑顔は今でも忘れられない。ドン・キホーテが取り持つ縁で、有形、無形の宝ものを高橋先生から頂くことができた。(関西外国語大学)

【学会情報（文学関係） 1】



(1) 20-23 de Julio

XIV Congreso Internacional de la Asociación Internacional de Teatro Español y Novohispano de los Siglos de Oro (AITENSO) (en el Centro de Artes Escénicas "San Pedro", Olmedo)

(2) 19-21 de agosto

Congreso Internacional 1609-2009. IV Centenario de los 'Comentarios Reales' del Inca Garcilaso de la Vega (en la Universidad Nacional Mayor de San Marcos y en la Universidad Nacional de San Antonio Abad, Cuzco)

【自書紹介】

『物語メキシコの歴史 太陽の国の英傑たち』（中公新書、2008）

大垣 貴志郎

自分の著作にふれることは気恥ずかしいが、思いがけない書評に出くわすより無難かもしれない。刊行にいたる道程だけ述べて本のでき具合は第三者の意見に委ねるべきだと思っている。

メキシコはどんな国かと自分に問い返し、メキシコを知る人には書き終わってから意見を求めようと考え、これからメキシコを訪れる人にはメキシコはこんな国ではないだろうかと案内する思いで執筆をはじめた。脱稿後、著者にとりメキシコは以前にもまして興味の尽きない国になったが、この国のさまざまな時代と人を理解し、将来を展望するなど無理な話だと実感するようになった。思い返せば、メキシコをはじめて訪れたのは40年ほど前だった。そのときからメキシコという国をわたしなりに理解しようと努めてきたので、その経緯をまとめあげたい願望こそ、自書の刊行につながったのだと思う。

実を言うと、拙書が中央公論新社の新書『物語シリーズ』の一冊として、しかもラテンアメリカの一国をはじめて単独でとりあげる『物語メキシコの歴史』になるとは夢にも思わなかった。編集者からメキシコの歴史変遷を通奏低音で書くよう依頼されたがこれは難題だった。しかし、振り返ってみると、本書を執筆する前にすでに書きあげていた原稿が手元にあった。いつか完成原稿として日の目を見ればよいと思い、単行本にももてなればなおさらうれしいと考えていた「お蔵入り」の仮題は、「メキシコ史の“地中海”1810年－1910年」であった。この背景は新書の「あとがき」に記してあるが、これまでの編年体を主流とした歴史書と異なる筆致で、かつメキシコの歴史を理解する場合の基礎知識がスペイン語圏や欧米の人と異なる日本人として、メキシコの歴史に流れる変遷を描きだしたかったのかもしれない。

脱稿する時期が迫ると「目次」の表記にこだわる欲がでたので工夫した。誰でも原稿を書くときは心血を注ぐが、もし、読者が本書の記述はおおむね平易に説かれているようだと思うふしがあれば、それは編集担当者の助けで緻密に原稿を推敲できたからである。さらに、印刷工程に入る前に本書の記述内容を確定する作業があった。それには出版社が依頼した複数の社外校閲者が時期をかえて複数回、全文に目を通して、疑義が生じると、編集者を通じて著者は記述を適正にする擦り合せをしなければならなかった。本の「あとがき」で、多くの著者は出版にこぎつけるまでの経緯を述べてその関係者に謝辞を書いているが、わたしの場合、そのことばに決して社交辞令は含まれていない。おもしろいことに、初版の「帯」のことばと刊行月日、発行部数はわたしの知らない間に決まっていた。（京都外国語大学）



【学会案内（文学関係）2】

(3) 15-19 de septiembre

XIII Congreso Internacional de la Asociación Hispánica de Literatura Medieval (en la Universidad de Valladolid)

(4) 30 de septiembre al 4 de octubre

VII Congreso Internacional de la Asociación de Cervantistas (en la Universidad de Münster)

【自書紹介】

フェデリコ・ガルシア・ロルカ『対訳 タマリット詩集』（影書房、2008年）

平井うらら

本書は、*García Lorca, Federico, Obras completas, Tomo I, VERSO. Recopilación, cronología, bibliografía y notas de Arturo del Hoyo, prólogo de Jorge Guillén, (Edición de cincuentenario), (vigésima segunda edición-cuarta reimpresión), Madrid, Aguilar, 1992.* 所収の *Diván del Tamarit*『タマリット詩集』の対訳詩集である。

「*el Tamarit*」とは、ロルカの叔父が所有していたタマリット農園（別荘）（*La Huerta del Tamarit*）のことである。ロルカ一家が所有していたサン・ビセンテ農園（*La Huerta de San Vicente*）からは、散歩しながら歩いて行ける距離であった。ロルカがグラナダを思うとき、真っ先に思い出されるのがこのタマリット農園と、そこで過ごした濃密な時間だったのであろう。

不思議なイメージの重なりが随所にちりばめられたこの詩集は、そんなに難しい言葉で書かれてはいない。作品に登場する、ジャスミン、チューリップ、桜、などの花、ミツバチ、蟻、など、登場するのは、私たちに身近な動植物であるし、アンダルシア独特のサボテン、アルヒベ（地下貯水槽）、強い太陽、などもそこに住む人々にとっては、ごく身近なものであろう。しかし、ロルカの詩は難解だと言われる。彼の難解さはどういう種類の難解さなのか。70数年もの時間をへだて、スペインと日本という文化的土壌の違いから来る「距離の難解さ」なのか。それとも意表をつく多様な表現がたたみかけるように続く流れをたどりきれない難解さなのか。しかし私には、次のような確信があった。ロルカの芸術は大衆に向かって作られ、大衆の前に持ち出され、圧倒的に大衆に支持されたものである。ということは、彼の詩の言葉はそれを受けとめる大衆にたちどころに理解され、その心をわしづかみにするようなものであったはずだ。彼の詩が実現する現場では、ちっとも難解ではなかったはずである。ただ、その現場がいまでは失われているので、解釈が難しくなっているのである。だから私がこの本で心がけたのは、その失われた「現場」をできるだけ再構成しつつ読んでいくこと、そして作品の内的論理のみに忠実に意味を追っていくことである。そしてその解釈の過程を検証できるように、できるだけ正直に解説の中に示した。

『タマリット詩集』は、彼の遺作となった。もちろん彼自身は、これから何十年も続く自分の芸術活動の一里塚と思っていただろう。アメリカから帰ってきた1931年ころから書き始められ、死の年である1936年にはほぼ一冊にまとめられて、母校グラナダ大学から刊行される予定だった。ロルカのこの詩集は、アラブの古い歌謡の形式であるガセーラ、カシーダ集として編まれている。古い歌謡の形式の中に、当時のスペインのもっともリアルな現実とその魂を盛り込んだのである。そのことによって彼は、レコンキスタの前も後も断絶することなく続く一貫したスペインの精神と魂を示してみせたのである。1924年に『ジプシー歌集』でグラナダの魂の根源をたどり、1929年には『ニューヨークの詩人』で現代文明の行き着く先をみつめた彼は、ふたたびグラナダにもどってグラナダの魂のありかを探ってみなければならなかったのである。

この詩集全体を貫く危機意識の深さ、その危機を乗り越えてどのように人々は救済されなければならないかという問いの切実さが全編にみなぎっている。この彼の試みのリアリティは、その詩のイメージの鮮明さとともに今も、私たちの胸に迫ってくるものである。

このロルカの詩の集大成ともいえる『タマリット詩集』の世界に原詩の持つうつくしいスペイン語のリズムとともに浸っていただきたい。（京都大学）



【自書紹介】

アメリコ・カストロ『セルバンテスへ向けて』（水声社、2008年）

本田誠二

これはアメリコ・カストロ著『セルバンテスへ向けて』第三版（大幅改訂版）の翻訳である（Américo Castro, *Hacia Cervantes*, Taurus, Madrid, 1967）。本書はカストロが『セルバンテスとスペイン生粋主義』（1966）の序文でも述べているように、『生粋主義』と補完的關係となっている。それは二作品が同一時期に出版されたこともあるが、内容上も互いに他にない部分をカバーしているからである。『生粋主義』が著者の新しい血統的歴史観にもとづき、十六世紀の横軸で切った文学論であったのに対して、本書は、それを縦軸で切って文学史的に論じたものである。カストロはセルバンテスに至るまでの中世・ルネサンス文学の代表的作家の中に、セルバンテスを予見させるものを見出している。そして本書では、各々の時代の作家が、スペイン社会における宗教的・血統的な対立を、各々の問題意識をもって、いかに自己の内面の世界、文学の世界の中にとりこんでいったかを、時代の流れに沿って描いている。第一部の「中世およびルネサンス文学」では『わがシッドの歌』、ロマンス語文学におけるスルタン・サラディン像、アントニオ・デ・ゲバラ、ピカレスク小説、『ラサリーリョ・デ・トルメス』、フアン・デ・マル・ラーラ等を扱い、次の第二部「セルバンテス」では、『セルバンテスの思想』や『生粋主義』では触れられなかった部分、とりわけ、小説の構造的な特色や異端審問との関連等を論じている。

カストロは第一部の『わがシッドの歌』に関して、主人公のうちに典型的に描かれた、カスティーリャ的な男性的価値観は、後にスペインを支配することとなる、キリスト教徒の価値観と神話そのものを表象するとしている。レコンキスタの英雄が生きたスペインは、同時に、三つの異なる血統が共存する社会でもあった。それは中世スペイン最大の散文家ドン・フアン・マヌエルが生きた戦乱の時代でもあった。彼が『ルカノール伯爵』のなかで描くカスティーリャのサラディン像には、そうした社会の調和と対立の様相が浮き彫りにされている。つまり他のロマンス語の国々とは異なり、イスラム教徒のサラディンをことさら道徳的に優れた人物として描く作者の視点には、カスティーリャ人の〈それ自体としての人間〉〈本質的人間〉のありようが示されているのである。カストロによれば、これはカスティーリャの血統システムと切り離すことはできない概念であった。因みに『ドン・キホーテ』は〈本質的人間〉であることに拘泥する旧キリスト教徒サンチョと、それに異議をとなえる新キリスト教徒ドン・キホーテとを関わせ、そうした社会的対立を人間的対話を通して乗り越えようとするものであった。

第二部「セルバンテス」のなかの『ドン・キホーテ』の構造について少しコメントすると、小説家セルバンテスがひとえに目指したのは固定化された〈本質的人間〉を小説的にいかに解体するかということであった。カストロの言葉に即していうと「内部と外部に関わる相互作用を、人間的行為に客体化させるという問題を抱えつつ、いかにして存在という川の流れが、幻想や信念や希望などと、生自体の流れとの、みごとな調和から湧き出るかを示す

こと」であった。具体的に言うと、ドン・キホーテは自らの内部にはっきりしたかたちでアロンソ・キハーノを抱えていると同時に、〈憂い顔の騎士〉という外部の存在にも自己を投影している。サンチョもドロテアも決して画一的ではなく柔軟で多面性をもった人物として描かれている。セルバンテスは、こうした内部と外部という両面性をもった人格を構築し、さらに多種多様な組み合わせと形態のもとで、他の者たちとの関係を作り上げてゆく。セルバンテスの小説的〈構造〉とはそういうことであり、そこから文学史上類を見ない、自己の内面性を強く意識した人間といった新しい文学的タイプが出現するのである。それこそ近代小説の目覚めや原点ともいえるべき要素であり、『ドン・キホーテ』から近代小説が始まったといわれる所以でもあった。

以上が大まかな『セルバンテスへ向けて』の構成だが、今回の翻訳出版では、セルバンテスに至るためにはどうしても欠かすことのできない『セレスティーナ』を論じた、カストロの別著（『文学的闘争としての《セレスティーナ》』（1965）を付録として含めることとした。

（神田外語大学）

【学会案内（語学関係）】

（1）23-25 de septiembre

XV Congreso Internacional de ASELE

El español en contextos específicos: enseñanza e investigación

Fundación Comillas (Cantabria) 独協大学の Pilar Lago さんが日本代表

（2）23-26 de septiembre

III Congreso de la Federación Internacional de Asociación de Profesores del Español (FIAPE) La enseñanza del español en tiempos de crisis

Facultad de Filosofía y Letras. Universidad de Cádiz

（3）14-18 de septiembre

Congreso Internacional de Historia de la Lengua Española

Universidad de Santiago de Compostela (España)

（4）23-26 de septiembre

III Congreso Internacional de la Federación Internacional de Asociaciones de Profesores de Español (FIAPE: <http://www.fiape.org/>) Universidad de Cádiz.

Tema: "La enseñanza del español en tiempos de crisis"



【自書紹介】

『カルデロン演劇集』（名古屋大学出版会、2008 年）

佐竹謙一

16, 17 世紀のスペインは政治的にも経済的にも凋落の一途を辿りつつあり、一部の裕福な者たちをのぞけば、人々の大半は貧しい生活を強いられ、やっとのことで糊口を凌いでいた時代であった。しかし皮肉にもスペインの文芸はかつてないほど華麗な花を咲かせた。文学ではセルバンテス、ロペ・デ・ベーガ、ゴンゴラ、ケベード、カルデロン、グラシアンなどが次々と傑作を世に送り、絵画・彫刻ではエル・グレコやベラスケスなど、また建築の分野ではエル・エスコリアル宮を完成させたエレーラなどが名を馳せた。特にフェリペ 4 世の時代になると、王侯貴族から庶民に至るまで人々の娯楽に対する関心が高まり、なかでも芝居見物が大衆娯楽の主流となった。当時絶大な人気を誇っていたのがロペであり、その演劇スタイルを踏襲したかたちでミラ・デ・アメスクア、ルイス・デ・アラルコン、ティルソ・デ・モリーナなどが頭角をあらわした。こうした先駆者たちと肩を並べ、やがて独自の演劇スタイルを構築するのがペドロ・カルデロン・デ・ラ・バルカである。

今回翻訳の対象として選んだのは、『十字架への献身』（*La devoción de la cruz*）、『イングランド国教会分裂』（*La cisma de Inglaterra*）、『淑女「ドゥエンデ」』（*La dama duende*）、『四月と五月の朝』（*Mañanas de abril y mayo*）、『密かな恥辱には密かな復讐を』（*A secreto agravio, secreta venganza*）、『人生は夢』（*La vida es sueño*）、『驚異の魔術師』（*El mágico prodigioso*）、『不名誉の画家』（*El pintor de su deshonra*）の 8 篇である。これはカルデロンが書いたとされる 110 篇以上の 3 幕物の戯曲、約 80 篇の 1 幕物の聖体劇の数に比べると、ほんの一部でしかない。またここでは世俗劇のみの翻訳であり、のちの神話劇や聖体劇にみられるような複雑な舞台装置を必要とする作品は含まれていない。

しかし、それでも作品を通じて他の劇作家には見られないカルデロンの独創的な文体、造形美、美辞麗句、視覚的効果を狙った詩的表現などが垣間見られる。さらに、作品の背景には当時の社会の様相や人々の生き様が克明に描き出され、舞台上演じられる登場人物たちの言動は必ずしも現実のものとは限らないとしても、少なくとも当時の貴族社会を中心とする人々の名誉観や庶民の信仰のあり方を伝えるには十分な力を持ちあわせていると言えよう。名誉観については、名誉の三悲劇ともいわれる『密かな恥辱には密かな復讐を』、『名誉の医師』（古屋雄一郎訳）（『スペイン黄金世紀演劇集』所収）、『不名誉の画家』において、名誉感情の行き過ぎとそれに関連する嫉妬心の恐ろしさが強調される。これらをシェイクスピアの『オセロー』と照らし合わせることで、どこか共通する人間の歪な感情を読み取ることも可能であろう。また信仰のテーマについては、『十字架への献身』や『驚異の魔術師』にみられるように、信仰が篤いカルデロンの思いがそのまま伝わるかたちとして物語が展開し、最後は魂の救済へと結びつくことになっている。『イングランド国教会分裂』ではシェイクスピアの『ヘンリー 8 世』と同じく国王ヘンリー、王妃キャサリン、枢機卿ウルジーにスポットが当てられているので、双方を読みくらべることで新たな比較文学の視点が生まれることも十分に考えられる。すでにいくつかの邦訳もあり、後世に残る大作『人生は夢』では、人間の存在をめぐる問題をより深く掘り下げようと、混沌とした世界のなかで人は自由意志により運命を好転させようという、人道的な考えが披瀝される。ここでもその背景にはキリスト教の理念が色濃く映し出されており、カルデロンのカトリック信仰に対する敬虔さが窺える。

〈マントと剣〉の喜劇といわれる『淑女「ドゥエンデ」』や『四月と五月の朝』では、登場人物の尋常ではない言動が醸し出す滑稽さを堪能することができよう。こうして全体を通してみると、カルデロンの「劇芸術」を文学的な角度から楽しめると同時に、そのおもしろさと曠古の妙趣を味わうことのできる作品群であると言える。（南山大学）



【自書紹介】

秘すれば花、秘せねば花なるべからず
—ラモンの『乳房抄』（関西大学出版部、2008年）について—

平田 渡

ラモン（ゴメス・デ・ラ・セルナ）にとって1917年（29歳）は、若き日日を総決算するような実りゆたかな年だった。『黒衣と白い肌の未亡人』『グレゲリーア』『乳房』『サーカス』と立て続けに四冊の本を出し、そのうちの『グレゲリーア』以下三冊が、やがてみずからの代表作、ひいてはスペイン前衛派の傑作に数えられるようになるからである。

ラモンが師表と仰ぐ作家のひとりアソリンは、ABC新聞に寄せた書評の中で、短詩型作品グレゲリーアの創始者を「事物の心理をきっちり捉えた作家」と的確に評した。そして、まるごと一冊、乳房をめぐる艶笑小咄で埋めつくされた『乳房』には深入りせず、「みだらで好色なところはどこにもなく、あの婦女子のふくらみをめぐる、さまざまな心理的な思索とメモからなっている」と一筆書き風に捉えている。名文家で知られるアソリンは、作風だけではなく、風貌も生まじめそうで、お堅い文士という印象を受けるが、いち早くラモンの『乳房』に注目したところを見ると、なかなか隅に置けない、具眼の士だったように思われる。

ラモンの『乳房』を抄訳した堀口大學の作品に、「乳房」と題する作品がある。両者を読み比べると、エロティシズムのかたちが似通っていることに気がつく。ボードレール、ヴェルレーヌ、ランボー、アポリネールといった先達の詩人たちは、あけすけで、露な、身もふたもない、エロティックな作品を書いたが、それとは異なり、ラモンと大學の作品は、色香が匂い立つような、抑制の利いた、上品な艶やかさを湛えているのである。大學がラモンの『乳房』に惚れこみ、フランス語（ジャン・カスー訳）からの重訳ながら邦訳を試みたのも、むべなるかなである。

堀口大學好みのエロティシズム観は、「エロチシズムを現はさうとするには、先づ隠さなければいけない。『隠すより現はるるはなし』はここではパラドックスではなく本則だ。半裸は全裸よりも裸體であり、うすものの女は、裸體の女より幾層倍も肉感的であるか知れない」（『饗宴にエロスを招いて』『詩集 乳房』所収）というものだった。一方、ラモンは、「衣に隠された乳房の方が、一糸まとわぬ乳房よりも魅力的な場合が多い」と述べている。日西の両詩人は、奇しくも、秘すれば花、秘せねば花なるべからずという世阿彌的な思想の持ち主だったのである。

また、ラモンは、『乳房抄』の「まえがき」の中で「これは春本ではない。猥褻なところはなく、晴朗さが広がるばかりである。僕は人生の園生に無数の乳房を目にしてきたが、その眺めを前にしてにこやかに落ち着いて考えたことを書いたにすぎない」と告白している。ここでは、「にこやかに」笑みを浮かべながら乳房を眺めているということが重要なのである。もっと言えば、『乳房抄』には、『グレゲリーア抄』（関西大学出版部 2007年）と同様、諧謔

が不可欠な要素として組み入れられているのだ。ラモンは、後者について「隠喩＋諧謔＝グレゲリーア（抄）」という公式を考案したけれど、それになぞらえれば、前者の場合は「エロティシズム＋諧謔＝乳房（抄）」ということになるだろう。まさに日本語の艶笑小咄というわけである。

ラモンは、グレゲリーアとは「散文による俳諧」だと言い、「グレゲリーアにおいて東洋と西洋が抱擁し合っている」と述べたが、考えてみれば、俳諧は諧謔と切っても切れない関係にある。俳諧の真髄は、連句を巻くときの遊び心から生じる軽みにあるからだ。ラモンがそこまで知悉していたかどうかはともかくも、日本に対して並ならぬ関心を抱いていた彼が、諧謔を利かせた、とっておきの一篇を引いておこう。

「大和撫子の乳房は可愛い乳房である。時として孔雀石か翡翠製で、また時として薄紗か睡蓮、もしくは椿で出来ているように見える。大和撫子の乳房は、大きな人形に付けてある、ふくらみ染めたばかりの乳房である。そうなったわけは色々と考えられるけれど、一つには、黎明の恩恵をいちばんに享受する国、日本は日出ずる国であるのみならず、乳出ずる国でもあるからに違いない」。（関西大学）

【自書紹介】

ラウラ・ガジェゴ・ガルシア著『漂泊の王の伝説』（偕成社、2008年）

松下 直弘

『漂泊の王の伝説』は通常ファンタジーというジャンルに分類されているが、実は歴史小説の要素をも含んでいる。6世紀、アラビア半島に実在した詩人、イムルーウルカイスがモデルになっているからである。彼は、イスラーム以前のジャーヒリーヤ時代、長詩カスィーダを書いたことで知られているが、伝説によると、漂泊の人生を送った人でもあった。

キンダ王国の王子として生まれたイムルーウルカイスは、父王がアサド族の手によって殺された後、国外を転々としながら復讐の機会を窺ったという。けっきょく、その夢はかなわないまま客死するが、彼の作品は後世まで伝えられるすぐれたものであった。

今から10年ほど前、バレンシア大学でアラブ古典詩の授業を受講していたラウラ・ガジェゴは、このエピソードからヒントを得て小説に取り掛かったようである。

キンダ王国のワリードは申し分のない王子だったが、あるときから詩人としての名誉欲が高じ、それまでとは違う人間に変貌していく。詩のコンクールで自分を破った絨毯織りに嫉妬し、無理難題を申し付けると、ついにその人生をも狂わせてしまうのである。挙句の果てに、その絨毯織りが死ぬまで織り続けて完成した絨毯も、盗人に持ち去られてしまう。自分の愚かさに気づき、絨毯を追って旅に出るところから、ワリードの漂泊の人生が始まる。ときには盗賊に加わり、ときには遊牧民の中に入り、またときには大商人の相談役にもなるが、どこにも安住の地はない。まるで運命に翻弄されているかのように、落ち着けそうになるたびに、すぐまた漂泊の旅に出なければならなくなる。こうして、主人公ワリードは、自分の犯した過ちの償いをしながら、漂泊の旅を続けているのだが、その姿を作品のタイトル *La leyenda del Rey Errante* は的確にあらわしている。

スペインの出版社は12歳以上を対象としてこの本を刊行しているが、とても児童文学とい

う枠には収まらないスケールの大きさと内容の深さを感じさせる。この小説を執筆したとき、ラウラ・ガジェゴはまだ20代前半の学生だったはずであるが、どうしてこれほど完成度の高い作品を描くことができたのだろうか。ほんとうに不思議で仕方ない。

ラウラ・ガジェゴは、『漂泊の王の伝説』を書く際、意外なほど古風に、しかも緻密に構成を練っている。キンダ王国で初めて開催された詩のコンクールで、ワリード王子は優勝を逃し、もう一度挑戦するが、またしても失敗し、3回目のコンクールが開かれることになる。そして、ワリードを破る名もない絨毯織りには、3人の息子がいる。漂泊の旅に出たワリードが会うのは、盗賊、遊牧民、商人という3つの異なる世界の人たちで、ワリードの運命も3度大きく転変する。これは、昔話を語る際、広く世界で使われてきた3回の繰り返しであろう。ラウラ・ガジェゴは、どの章も程よい長さで切って次の場面につなげるという手法で、この3回の繰り返しを実に巧みに取り入れている。彼女ははじめ、ワリードを主人公とした物語ではなく、絨毯織りとその息子たちの話を考えていたようである。ワリードを中心に据えて、ワリードと絨毯織り、そしてワリードと絨毯織りの3人の息子たち、というふうに重層的に描くことで、昔話風でありながら昔話を超える作品が出来上がったのではないかと思われる。

この作品の中で、ラウラ・ガジェゴの筆が特に鮮やかに描いているのは、詩の詠唱の場面であろうか。キンダ王国の詩のコンクールでは、詠唱者の頭の中に記憶として蓄積された言葉が、豊かな音声とともに聴く者の耳に運ばれる。そのとき、言葉は肉体を持ち、聴衆の眼前には砂漠やオアシスやラクダを連れた遊牧民の姿がまざまざと再現される。アラブの人たちが持っている肉声への強い信頼感を、ラウラ・ガジェゴはこの作品の中で見事に描いている。(拓殖大学)



【書評】

網野徹哉『インカとスペイン 帝国の交錯』（興亡の世界史 12、講談社、2008年）

井上 幸孝

マヤ・アステカ・インカなどのアメリカ大陸先住民諸文明を語る際、どのような観点からいかなる時間と空間を設定して叙述するのか。彼らの歴史の根本的な理解に関わるがゆえにきわめて重要な問題である。この問いを考える上で、網野氏の近著は実に刺激的であり、評者のように比較的近い分野（アステカ・植民地期メキシコ）を学ぶ者にとって道標となる。

著者も述べているように、一般的なインカ史はスペイン人の征服をもって終わる。だが、ヨーロッパ人到来以前の文明の担い手たちは、征服後ただ静かに消え去ったわけではないことが近年自明になってきた。ある者たちは疫病や激しい労働により命を失ったが、別の者たちは激しい抵抗を行った。一部の人たちはスペイン人社会に同化したが、中には新たな社会規範を逆手にとって生き残りを試みる人々もいた。

かくも多様な先住民社会のダイナミズムを把握するには、先スペイン期の華麗なる繁栄と征服以降の衰退という単純な図式はもはや有効でない。先スペイン期社会は言うに及ばず、征服者・支配者として到来した人々の側の歴史的背景も射程に収める必要が生ずる。こうした問題意識に基づき網野氏は以下のような構成で叙述を進めている。

第1章「インカ王国の生成」と第2章「古代帝国の成熟と崩壊」では、先スペイン期の歴

史的経緯、インカ社会を支えていた基本的な概念や制度が概述される。第3章「中世スペインに共生する文化」と第4章「排除の思想 異端審問と帝国」では、スペイン側の歴史的背景が説明される。その上で、本書の歴史叙述の根幹となる植民地期アンデスの状況がいくつかのテーマ設定の下に叙述される。第5章「交錯する植民地社会」では、インカ征服とその直後の複雑な社会状況が述べられている。第6章「世界帝国に生きた人々」はスペイン帝国全体を視野に入れてヒトやモノの移動と流れを追う。第7章「帝国の内なる敵ユダヤ人とインディオ」は、スペイン人と先住民を対置させるだけでは説明できない植民地での状況をポルトガル人の動向も射程に収めて論じる。第8章「女たちのアンデス史」は近年詳しい研究が進む植民地期の女性に焦点を当てる。第9章「インカへの欲望」では、インカイメージの歴史化と再歴史化という観点が提示され、植民地期先住民の言説が分析される。最終章「インカとスペインの訣別」はブルボン改革以降、独立へと向かう時期を扱い、前章で触れられていたインカの歴史化・再歴史化といった「水脈」を念頭においてトゥパク・アマルらの動向を論じる。

このように、著者の主たる関心は植民地期の先住民にある。しかし、その「先住民」とは、スペイン人や混血者、ポルトガル人や黒人などの他集団と別個に存在していたのではなく、彼らとの絶え間ない相互関係の上に生きていたのである。そこを見落とすと植民地の実状を無視することになってしまう。また、彼らは先スペイン期からの遺産も有していたが、その「遺産」とは、日常生活や政治的行動などに垣間見られる習慣や観念だけでなく、征服後に形作られたイメージでもあった（これを著者は「歴史化」や「再歴史化」といった用語で表現している）。

結局のところ、広大なスペイン帝国領の特定の地域・時期の事情だけを見て、我々の（あるいは史料作成者の）価値判断でもって字句通りに理解しようとする、実態を見逃してしまう。本国スペインとそれを取りまく諸事情（例えばユダヤ人問題）、現地で遥か以前から築き上げられてきた文化（例えばインカの互酬の概念）、これら二つの社会が交わった後に戦略的に生成された自画像や他者像（例えばインカの歴史化・再歴史化）、という少なくとも三つの要素を考えあわせてはじめて一定の解釈が示される。本書はこの三点を有機的に組み合わせることで、生きた歴史叙述を実践したと言える。

無論、こうした大きな展望に立った歴史叙述が成立するには、地道な個別研究の進展が不可欠である。新史料や事実関係を「発掘」するのはもちろんのこと、以前からある史料を新たな観点から読み直し、既知の出来事の意義を再考するという作業が欠かせない。これに関連して、同じく昨年出版された『他者の帝国—インカはいかにして「帝国」となったか』（関雄二・染田秀藤編、世界思想社）、『征服者ピサロの娘 ドーニャ・フランシスカ・ピサロの生涯 1534-1598』（M・ロストウォロフスキ著、染田秀藤監訳、世界思想社）も併せて読むことをお勧めしたい。（専修大学）

— お 知 ら せ —

京都ラテンアメリカ研究所主催第9回ラテンアメリカ研究講座
日墨交流 400 周年記念国際シンポジウム「メキシコの歴史と現在を考える」
Simposio Internacional 2009 Del encuentro al encuentro: Japón y México, 1609-2009
Instituto de Estudios Latinoamericanos de Kyoto, Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto
2009 年 5 月 25 日 (月) ～27 日 (水)・30 日 (土)
後援：在日メキシコ合衆国大使館
会場：京都外国語大学内国際交流会館 4 階会議室

5 月 25 日 (月)

15:00 開会

15:10-16:30

Nueva España: su nacimiento y su lugar en el mundo

(植民地時代のメキシコ) ※スペイン語 (通訳なし)

ベルナルド・ガルシア・マルティネス (メキシコ大学院大学) Bernardo García Martínez (El Colegio de México)

コメンテーター：小林一宏 (上智大学名誉教授)

5 月 26 日 (火)

13:20-14:50

Las dificultades del nuevo Estado independiente(1821-1848)

(メキシコ独立戦争の意義) ※スペイン語 (通訳なし)

ホセフィナ・ソライダ・バスケス (メキシコ大学院大学)

Josefina Zoraida Vázquez (El Colegio de México)

コメンテーター：北條ゆかり (摂南大学)

5 月 27 日 (水)

13:20-14:50

Del desastre a la consolidación nacional (1848-1892)

(メキシコ・アメリカ戦争の悲劇と建国の礎) ※スペイン語 (通訳なし)

アンドレス・リラ・ゴンサレス (メキシコ大学院大学前学長) Andrés Lira González (El Colegio de México)

コメンテーター：立岩礼子 (京都ラテンアメリカ研究所)

15:00-16:30

Japón y México: 400 años de amistad

(日本とメキシコの出会いー400 年を遡るー) ※スペイン語 (通訳あり)

ミゲル・ルイス＝カバーニャス (駐日メキシコ大使) Miguel Ruiz-Cabañas (Embajador de México en Japón)

コメンテーター：オラシオ・ダンテス (京都外国語大学)

5 月 30 日 (土)

14:00-15:00

Historia de México: reflexión y perspectiva

(メキシコ史の回顧と展望) ※スペイン語 (通訳なし)

ホセフィナ・ソライダ・バスケス (メキシコ大学院大学)

Josefina Zoraida Vázquez (El Colegio de México)

15:10-16:00

ディスカッション※スペイン語 (通訳なし)

ベルナルド・ガルシア・マルティネス／ホセフィナ・ソライダ・バスケス／アンドレス・リラ・ゴンサレス

辻豊治 (京都ラテンアメリカ研究所) ／立岩礼子

コーディネーター：大垣貴志郎

16:10 閉会

【書評】

太田靖子・著『俳句とジャポニズム - メキシコ詩人タブラーダの場合 - 』

(思文閣出版、2008 年)

片倉 充造

表題の通り俳句ファンならびにスペイン語圏(メキシコ)文学通に待望の一書が発行された。このテーマは、著者の文人的素養(俳人／文学研究者)をそのまま反映するものである。比較文学の泰斗芳賀徹氏に師事し、約 15 年間を費やして書き上げた学位論文(学術博士)の知の結晶は、「第 1 章タブラーダの資質と俳句との関係」から「終章タブラーダ・ハイクの特徴と意義」までの 6 章を本論とする A 5 版 300 頁超の大部な著作である。スペイン語圏での先行研究における日本の俳句への知識不足という実情が、妙齡の頃より俳句をたしなむ同氏を本格的な研究に向かわせたようだ。

日本メキシコ修好通商条約締結(1888)や、日露戦争勝利(1905)によるメキシコでの「日本ブーム」という状況下、詩人タブラーダ(1871～1945)は、サンフランシスコ経由で横浜へ入港し、約 6 ヶ月間滞在した。そのことが自邸の日本庭園や和室、書斎の浮世絵などに象徴される「日本趣味」を決定づけ、訪日中、「憧れの地」から故国の雑誌社へ書き送った数々のエッセイは、19 年後『日の国にて』(1919)に収載された。こうしてタブラーダの健筆は、西洋文化圏におけるジャポニズムと時を同じくして、フランス俳諧のポール・ルイ・クーシュ(1879～1959)に影響されながらも、「日本俳句の模倣を超えた」(＝簡潔に生命の真髄をハイクに詠み上げた)第一ハイク集『ある一日』(1919)や、〈叙情的切り取り〉を指向した第二ハイク集『花壺』(1922)へと結実する。

代表的なものを二句紹介して見よう。[蛍 一本の木に蛍たち・・・／夏のクリスマス？(「夜」、『ある一日』、115 頁。)] **LUCIÉRNAGA** Luciérnaga en un árbol... /¿Navidad en verano? / [西瓜 夏の、赤くて冷たい／一切れの／西瓜の／大笑い！(「果物」、『花壺』、162 頁。)] **SANDÍA** ¡Del verano, roja y fría/carcajada, /rebanada/de sandía!]

俳句(短詩型)は〈凝縮詩〉の代表であり、それは表出する瞬間美の呈示でもあるが、

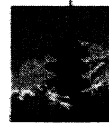
「青い空」よりも「空」のほうが限定のない分だけ広義であるのと同様、その解釈はさらに深奥であるとも言えるだろう。

著者は、俳句をスペイン語圏に広めた第一人者としてタブラーダが日・墨両国においてもっと研究が重ねられ、相応の文学的・芸術的・社会的評価が示されるべきものと叙述する。同じく近・現代メキシコ文学の研究や紹介を続ける立場の評者にも異論はない。近代メキシコ(ラテンアメリカ)を代表するピカレスク小説『ピト・ペレスの自堕落な人生』(1938)の作者ホセ・ルベン・ロメロ(1890～1952)もその『全集』には、『タカンバロ』(*Tacambaro*, 1922)などタブラーダ経由の「三行詩(≒ハイク)」を意識した詩作品を少なからず残している。

訪日の滞留期間や 1930 年代以降の創作活動にいささか物足りなさを見る評者ではあるが、タブラーダ本来の比類なき文学的価値が理解・共有されるには、著者をはじめとする比較文学研究者が、滞日の物理的な時間数にかかわらず当時のフランス文壇での受容度を凌駕したタブラーダ・ハイクの本髄を、「フランス文学会」等内外の様々な学問の場で発信し続けるこ

とであり、評釈をふんだんに盛り込んだ日西両語での『詩集』（翻訳）を単行本として刊行することであり、紀行文『日の国にて』などジャパノロジーに資する文献を検証し、いずれは『タブラーダ著作集』（日本語版）を発行することであろうと思われる。

この重厚で細緻な研究書をとおして〈俳句の異化〉を味読するのも面白い。（天理大学）



【書評】

Acquaroni, Rosana : *Las palabras que no se lleva el viento:*

literatura y enseñanza de español como LE/L2, Santillana, 2007

大森 洋子

スペイン語教育の中で“文学”は、とかく専攻学科のカリキュラムの中で論じられることが多い。初修外国語（第2外国語）として学ぶ場合には、中級クラスの講読としていくつかの文学作品を外国語学習用テキストにして利用するのが一般的な傾向と言えよう。その中では訳読に主眼が置かれていないだろうか。コミュニケーション能力の向上が強調される昨今では、文学作品の講読等がその目的にはなじまないような印象を与えている感がある。2007年 Santillana から出版された “*Las palabras que no se lleva el viento : literatura y enseñanza de español como LE/L2*” では外国語としてのスペイン語教育において文学作品を用いることの意味、そして具体的な作品を用いた授業での活動例の提案を行なった画期的な著作と言えるだろう。

著者 Rosana Acquaroni は20年以上外国語としてのスペイン語教育に携わり、スペイン語教師養成プログラムの講師等を歴任しているスペイン語教育の専門家であるが、もう一方で、多くの賞を獲得している詩人でもある（主な著作は *Del Mar bajo los puentes*, *El Jardín Navegable*, *Lámparas de arena*）。特に、研究者としては、彼女が主張する“文学的能力”—文学作品を理解する力（*competencia literaria*）、比喻理解能力（*competencia metafórica*）の育成について今後の研究が期待される。

本書は、構成が大きく二つに分かれ、最初の部分は、第1章と第2章からなり、文学の果たす役割、コミュニケーションとして理解される文学、さらに外国語としてのスペイン語教育において果たす文学の役割などが論じられている。

特筆すべきは、スペイン語の入門・初歩的レベルから文学的な作品を導入し、“文学的能力”を育成していくという指摘である。文学作品を読む能力等をはぐくむことは、文学作品それ自体がオーセンティックな言語使用例であるので、コミュニケーション能力の向上を目指すことを目的とする言語教育の中でも重要な役割を果たすと言うのである。文学作品が言語教育にもたらす効果としては、実際の言語使用を経験すること、つまり、学習目的とする言語表現—文法項目—を実際の文脈の中で提示することができること、また歴史的・社会的

な出来事について作品を通して知ることができること、文化的事柄の理解を助けること、などを挙げることができるだろう。文学作品を外国語教育の道具として用いるときにとにかくその言語表現に注意が集中し、その作品の面白さ、解釈の方法など学習者の興味を引き出すことが忘れがちにもなる。文学作品に接し、その面白さを引き出しながら読めるようになる能力こそが、“文学的能力”であるという。文学作品を外国語教育の現場に持ち込む教師の役割としては文学的能力向上のためのさまざまなアクティビティを工夫することにもあるといえるだろう。

第3章では、外国語教育にどのように文学を利用するかの実践例を、4つのテーマ-la memoria, la vida, el amor, la muerte-をたて、それぞれについて、詩、物語、演劇のジャンルから作品を選び、実際のアクティビティを紹介している。取り上げている作家は、Mario Benedetti, Julio Cortázar, Carmen Martín Gaité, Antonio Machado, Federico García Lorca, Pablo Neruda など多岐にわたっている。作品のひとつひとつについてそれを理解するための一連—1. 準備 (prelectura)、2. 発見・理解 (lectura)、3. 発展 (poslectura)—のアクティビティがついており、それには教師のためのアドバイス (contraviento) がつけられている。さらに語の比喩的使用の訓練のためのアクティビティも用意されている。

言語学習が一生をかけるものであるとすると、文学作品が果たす役割は非常に大きいと理解できる。その意味でわれわれスペイン語教育に携わるものが時に文学作品を題材に授業を行い、その楽しさを教えることは大きな意味があると言えるだろう。本書で紹介されている作品とそのアクティビティはいずれもヨーロッパ参照枠で示されている B1—C2 レベルのかなり高度なものである。そのまま教室で利用する機会は専攻学科を除いてはありえないと思われる。しかしながら、これらを丹念に読み、その手法を理解することで、学習者用に編まれている副読本の作品を楽しく読ませるための工夫をする際の参考になるだろう。また、評者のように文学を専門としないものにとってはそれぞれの作品ガイドとして読みながら、本書で選択された作品を読んでみる、という楽しみも与えてくれる一冊と言える。

(明治学院大学教養教育センター)

【新刊案内】

2008 年

朝日新聞出版『スペイン・ポルトガル：大航海時代と巡礼の旅』朝日新聞出版
アジェンデ、イサベル『ゾロ 伝説の始まり』上、下、中川紀子訳、扶桑社
碇順治『スペイン』河出書房新社
石田博士『中南米が日本を追い抜く日 三菱商事駐在員の目』朝日新聞出版
伊東章『マニラ航路のガレオン船 フィリピンの征服と太平洋』鳥影社
伊藤章治『ジャガイモの世界史：歴史を動かした「貧者のパン」』中央公論新社

上野清士『ラス・カサスへの道 500年後の「新世界」を歩く』新泉社
 大泉光一『捏造された慶長遣欧使節記：間違いだらけの「支倉常長」論考』雄山閣
 大塚勝弘『現代アルハンブラ物語 ワシントン・アービングの夢と現実』東京図書出版会、リフレ出版（発売）
 鍵和田哲男『明日はあしたの風が吹く 退屈しない国－南米』東京図書出版会、リフレ出版（発売）
 片倉充造『スペイン・ラテンアメリカ図書ファイル』沖積舎
 勝峰昭『イスパニア・ロマネスク美術』光陽出版社
 小池康弘『現代中米・カリブを読む 政治・経済・国際関係』山川出版社
 ゴーチェ、テオフィル『スペイン紀行』桑原隆行訳、法政大学出版局
 サルセド＝バスタルド、ホセ・ルイス『シモン・ボリーバル ラテンアメリカ解放者の人と思想』上智大学イベロアメリカ研究所訳、新装版、春秋社
 自治体国際化協会バリ事務所編『スペインの観光政策』自治体国際化協会
 関哲行、立石博高、中塚次郎編『スペイン史 I、II』山川出版社
 高山智博『古代文明の遺産 調和と均衡 メキシコからボリビアにかけて』アサヒビール、清水弘文堂書房（発売）
 恒川恵子『比較政治 中南米』放送大学教育振興会
 富野幹雄『グローバル時代のブラジルの実像と未来』行路社
 中嶋茂雄『少数言語の視点から カタルーニャ語を軸に』現代書館
 名越啓介『CHICANO』河出書房新社
 パスター、ロバート・A.『アメリカの中南米政策 アメリカ大陸の平和的構築を目指して』鈴木康久訳、明石書店
 ハムネット、ブライアン『メキシコの歴史』土井亨訳、創土社
 細谷広美編『多文化共生型の新たな市民社会像の構築 ラテンアメリカからの日系人を中心とするニューカマーの移住者たちと地域社会 調査研究報告書』神戸大学大学院国際文化学研究科
 堀越千秋『赤土色のスペイン』弦書房
 堀越千秋『絵に描けないスペイン』幻戯書房
 ボロテン、バーネット『スペイン内戦 革命と反革命』上、下、渡利三郎訳、晶文社
 マクススキミング、ジェフリー『インディオの秘薬と謎の空中都市』貴美島紀訳、ランダムハウス講談社
 宮下誠『ゲルニカ：ピカソが描いた不安と予感』光文社
 森本祐子『会話にスパイス más más おいしいスペイン語』日本放送出版協会
 山口伊佐美『知られざる巨大市場ラテンアメリカ』日経 BP 企画、日経 BP 出版センター（発売）
 山田篤美『黄金郷（エルドラド）伝説：スペインとイギリスの探検帝国主義』中央公論新社
 結城昌子『ピカソ 描かれた恋』小学館
 吉田太郎『世界がキューバの高学力に注目するわけ』築地書館

ルカス、ハビエル『サラミスの兵士』河出書房新社
ロストウォロフスキ、マリア『征服者（コンキスタドール）ピサロの娘（メスティーサ）ド
ーニャ・フランシスカ・ピサロの生涯：1534－1598』染田秀藤監訳、世界思想社
金沢百枝『ロマネスクの宇宙—ジローナの《天地創造の刺繍布》を読む』東京大学出版会
ジャン・クレール『クリムトとピカソ、一九〇七年—裸体と規範』水声社
天理大学アメリカス学会編『アメリカス世界における移動とグローバリゼーション』天理大
学出版部
京都セルバンテス懇話会編『イスパニア図書』11号
スペイン現代史学会編『現代スペイン』17号
スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会編『スペイン・ラテンアメリカ美術史研究』9号『ユ
リイカ 特集 ピカソ』11月号

2009 年

マルコス『マラーノの武勲』作品社
ストイキツァ、ヴィクトル（松井美智子訳）『幻視絵画の詩学：スペイン黄金時代の絵画表象
と幻視体験』三元社
ケイメン、ヘンリー『スペイン黄金時代』立石博高訳、岩波書店
ガルシア＝モラレス、マデライダ『エル・スール』野谷文昭・熊倉靖子訳、インスクリプト
レベルテ、P.『戦場の画家』集英社文庫
関 哲行『旅する人々』岩波書店
ラス・カサス『インディアス史全7冊』長南実訳・石原保徳編、岩波書店
山道佳子、矢嶋由香利、鳥居徳敏、木下亮『近代都市バルセロナの形成』慶應義塾大学出版
会
後藤雄介『語学の西北 スペイン語の窓から眺めた南米・日本文化模様』現代書館
佐野 誠『もうひとつの失われた10年を越えて—原点としてのラテンアメリカ』新評論
山田真一『エル・システム—音楽で貧困を救う南米ベネズエラの社会改革』教育評論社
村上勇介・遅野井茂雄『現代アンデス諸国の政治変動—ガバナビリティの模索』明石書店
足立力也『丸腰国家軍隊を放棄したコスタリカ 60年の平和戦略』扶桑社新書
国本伊代『メキシコ革命とカトリック教会』中央大学出版会

日本イスパニヤ学会 2007 度会計報告

(2007 年 4 月 1 日～2008 年 3 月 31 日)

収入

(単位：円)

科目	予算額	決算額	収支	備考
会費	2,960,000	3,497,400	537,400	
正会員		2,981,000		
海外在住会員		45,000		
賛助会員		180,000		
購読会員		29,400		
過年度会費		243,000		
前受会費		19,000		
寄付	0	15,000	15,000	
銀行口座利子	0	932	932	
当期収入合計	2,960,000	3,513,332	553,332	
前期繰越金	6,601,639	6,601,639	0	
収入合計	9,561,639	10,114,971	553,332	

支出

学会誌・会報発行経費	1,100,000	926,844	-173,156	
53 回大会開催費用	250,000	137,255	-112,745	
会場校関係		-130,605		会報 13 号参照
大会案内発送費用		45,910		
プログラム印刷・発送費用		221,950		
事務委託費	1,000,000	972,415	-27,585	
会議開催費用	30,000	48,320	18,320	
庶務委員経費	60,000	60,000	0	
通信・交通費	250,000	117,865	-132,135	
学会奨励賞	150,000	50,000	-100,000	
理事・監査改選費用		165,520	165,520	
その他	100,000	95,730	-4,270	
銀行手数料		27,705		
雑費		68,025		
当期支出合計	2,940,000	2,573,949	-366,051	
収支差額(次年度繰越)	6,621,639	7,541,022	919,383	
支出合計	9,561,639	10,114,971	553,332	

会計委員 宮本正美

監査の結果、異常なきものと認めます。

2008 年 10 月 1 日 会計監査 阿部三男

2008 年 10 月 1 日 会計監査 蔵本邦夫

2007 年度期末残高内訳	
みずほ銀行普通預金	611,453
郵便局振替口座	6,875,465
三井住友銀行普通預	54,104
計	7,541,022

日本イスパニヤ学会 2009 年度会計案

(2009 年 4 月 1 日～2010 年 3 月 31 日)

収入

(単位：円)

科目	2007 年度決算	2009 年度 案	収支	備考
会費	3,497,400	3,200,000	-297,400	8000 円×400 名
正会員	2,981,000			
海外在住会員	45,000			
賛助会員	180,000			
購読会員	29,400			
過年度会費	243,000			
前受会費	19,000			
寄付	15,000	0	-15,000	
銀行口座利子	932	0	-932	
当期収入合計	3,513,332	3,200,000	-313,332	
前期繰越金(※)	6,601,639	7,421,022	819,383	
収入合計	10,114,971	10,621,022	506,051	

支出

学会誌・会報発行経費	928,844	1,050,000	123,156	会報 13 号参照
大会開催費用	137,255	540,000	402,745	
会場校関係	-130,605	250,000		
大会案内発送費用	45,910	50,000		
プログラム印刷・発送費用	221,950	240,000		
事務委託費	972,415	990,000	17,585	
会議開催費用	48,320	50,000	1,680	
庶務委員経費	60,000	0	-60,000	
通信・交通費	117,865	150,000	32,135	
学会奨励賞	50,000	150,000	100,000	
理事(・監査)改選費用	165,520	170,000	4,480	
その他	95,730	100,000	4,270	
銀行手数料	27,705	30,000		
雑費	68,025	70,000		
当期支出合計	2,573,949	3,200,000	626,051	
収支差額(次年度繰越)	7,541,022	7,421,022	-120,000	
支出合計	10,114,971	10,621,022	506,051	

※2009 年度の前期繰越金は、2007 年度の次期繰越金に 2008 年度の会計案を加味した金額です

作成

会計委員 宮本正美

日本イスパニヤ学会 第 54 回大会会計報告（会場校関係）

【収入】 (単位：円)

懇親会参加費（5,000×64名）	¥320,000
協賛金（書籍展示をした書店・出版社から）	¥60,000
美術館観覧者昼食代	¥51,000
美術館観覧料	¥10,880
収 入 計	¥441,880

（弘学社よりワイン 12 本寄贈）

【支出】

講師謝礼	¥114,500
大会運営アルバイト謝礼	¥28,000
理事会昼食代	¥16,672
大会運営者昼食代	¥4,000
大会参加者・運営者茶菓等	¥8,717
懇親会費（5,000×60名）	¥299,475
美術館観覧者昼食代	¥52,500
消耗品費	¥8,032
美術館観覧料	¥11,200
郵送料・振込手数料	¥2,670
支 出 計	¥545,766

収 支 差 額	¥-103,886
---------	-----------

【委員会より】

編集委員会：『イスパニカ』53号原稿募集と奨励賞申請について

昨年の年度大会総会でお伝えしましたが、投稿規定の一部が改訂されております。『イスパニカ』53号（2009年12月発行予定）への投稿締切は2009年3月末日、また投稿時点で電子データも添付することになりましたのでご注意ください。奨励賞は原稿投稿時点で申請することになっておりますので、よろしく願いいたします。尚、詳細は『イスパニカ』52号（2008年12月発行）および日本イスパニヤ学会 HP をご覧下さい。（編集委員長 稲本健二）

広報委員会

(1) 日本イスパニヤ学会 2009 年度第 55 回大会のお知らせ

下記の通り、2009 年度第 55 回大会を開催しますのでご案内申し上げます。

開催日：2009 年 10 月 10 日（土）、11 日（日）

会 場：静岡県立大学（静岡市）<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/>

研究発表募集については後日ご案内します。（申込締切は 8 月上旬の予定）。

(2) 名簿改訂のお知らせ

新しい会員名簿を作成します。追って皆様に掲載データの確認、訂正をお願いしますので、どうぞよろしくお願いします。

【原稿募集】

本誌『会報』の原稿を募集しています。

- ◇ 国内外の学会案内と報告
- ◇ 国内の学術講演会・行事の案内と報告
- ◇ スペイン語圏に関する新刊書（和書・洋書）の紹介
- ◇ その他

（使用言語：日本語またはスペイン語）

（原稿分量：1000～1400 字程度）

【編集後記】

『会報』14 号をお届け致します。ご覧のように、今号より B5 版に変更しました。巻頭言、エッセー、本の紹介、書評の玉稿をお寄せくださった会員の方々には、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。B5 版に変更したところで、次号からは巻頭言、エッセー、会員の新刊書の紹介、書評などに加えて、会員の留学報告記、旅行記、研究動向などさまざまなテーマの原稿を掲載できればと考えておりますので、どうかご寄稿のほどよろしくお願いいたします。原稿の執筆を依頼する場合は締切日を設定しますが、それ以外は締切は決めておりませんので、原稿ができ次第いつでも担当者までお送り下さい。ある程度原稿が集まり次第刊行したいと考えております。（編集担当理事：坂東省次）